

蘇芳集

初

夢

青山

丈

買うてきたばかりのポインセチアかな
よく見えるポインセチアを置いてから
煤逃の昼のクスリも持つて出る
日の差して八ッ手が花になつてくる
袖を買ふ人が居たので袖を買ふ
カステラのざらめの落ちる冬休
初夢の千住の街の何処かかな

石鎚の風

宮尾直美

烏瓜山のどこかにある真つ赤
庭下駄に左右の履きぐせ残る虫
日の暮のすこし旅めく雪螢
枯蓮の賑はふ風の行方かな
石鎚の風くる頃や懸大根
波郷忌の一夜をあげし冬椿
夕凍みの俄や厨より灯す

黄落

八木下末黒

文化の日無声映画の字幕かな
文化の日手足もの言ふチャップリン
一代の家の解体文化の日
黄落や銀杏の隙間少しづつ
高高く鈴懸落葉日の匂ふ
咲きすぎてつまらなくなる石路の花
裏山に白きが弾け花八っ手

唐崎夜雨

吉田幸敏

金継ぎの古九谷にこそ菊贈
わが声に貌もたげたとこよむし
冬立つと庭木の枝をすこし伐る
默契は默契として帰り花
舟棹をゆつくりつかふ初しぐれ
唐崎の夜雨となりぬ初時雨
深更の眼鏡を外す冬ちろろ

鳥のやうに

小川美知子

お茶買つて昼餉ととのふ草紅葉
みんな何か見てゐる秋の煌めけり
神垣の鈴掛落葉風吹けば
小雪のホームドアに雨の粒
冬晴の洗濯バサミ深く噛ます
句会の日の昼餉かんだん冬椿
鳥のやうに並んで座る冬日かな

胸のうち

木内憲子

寒星やけふを仕舞ひのひと仕事
冬の灯を殖やして文字を落ちつかす
身辺の雑然と冬ぬくきかな
ともかくも急ぐマフラー二重巻き
いちにちを冬日のなかにゐて眠し
何か忘るる冬川を渡りては
玻璃ごしの花ひひらぎを胸のうち

のど仏

小島みつ如

朝寒や濯ぎ物干すのど仏
予定なしさて綿虫と遊ばむか
家族殖ゆ仏間匂へる冬の菊
海風の木枯となる氏神社
冬落暉眩し出窓の花束も(卒寿祝)
短日や脱ぎぬし上着どこかしら
鮪ゐるらし一面の漁火よ

枯野

清水裕子

人逝くや十月桜ほつほつと
葉隠れの秋蝶に雨上がりくる
足跡も落葉も掃かれ葬儀待つ
香煙に眼失せしよ今朝の冬
墓原の理路整然として寒し
枯野ゆく寂しきものに鳥のこゑ
諸草の枯の明るさ雀翔ち

葱刻む

下平直子

筑波嶺の稜線黒き今朝の冬
文化の日手作り碗に飯を盛り
魚跳ねて十一月の日をこぼす
冬暁や列車通過の地の響き
大根を洗ふや夕日したたれり
玻璃越に見えて明るき炬燵の間
葱刻む忘れたきこと忘れたく

露けしと

富田正吾

歩きたい町を歩けばいわし雲
ふたりして露けしといふまたも言ふ
燈火親し自叙伝の恋まつしぐら
蛇笏忌の山遥かなりはるかなり
満月は一行の詩の産み卵
鶏頭のうしろに印度大使館
新宿を歩いて秋を惜しむなり

森一つ

野路斉子

寒林の影と云ふ影睦まじく
門松の後ろ姿も見慣れけり
こんなにも小さかつたか雪の森
降る雪に見失ひたる森一つ
雪合戦なのか鴉の闘ふは
赤々と森の信号冬木の実
風荒ぶ冬芽の森は反抗期